

出版文化の中の八犬伝―「作家」の成立

千葉大学 高木 元

『宝船黄金椀』(合巻、東里山人作、春扇画、文政元年、和泉屋市兵衛板)

「板元(泉市)」

金銀のために使はれて人々身を苦しめる所の画組み。「皆が精を出してさつくとやりなせへ。わしが此処に控へ居るから、猿が餅じや。遅いと板元も利あいが悪いから自づから二年後へ廻りませぞ。何でも早いがお徳じや〜」

作者

先画組八当たり前の芝居がかりにして、白氏文に「古塚の狐妖として且老ひたり、化して婦人となる」と云ふ古事を挙げて、夫木集に「花を見る道の辺の古狐」の哥に合せると、すつばり信田妻の趣向が出る。奇妙〜。

筆耕

サア〜此処八筆耕が沢山だから、先これぎりにして、次へつくとしてしまいませう。なんでも合印なきア目に立つやうに大きく書ておかねへと、見物がつい見落して、とんだ所を読むやつサ。京橋の先生が一三四と丁寧(ていねい)に番付を付けた八きついもんだ。

板摺

先これで合巻の方(ほう)大概(たいがい)上りだ。これから青の方(ほう)へ掛ると、もふしめたもんだ。ヨット外題(けいたい)の色差(いろさ)があつたけ。あいつア夜なべにやアちつとむつかしいわ〜。

板木師

此一丁八とんだくどひに八おそれる。ヨットこいつア濁りの仮名(か)だらう。煩くあるやつだ。石坂(いしか)に雨降り、引ぎやの御簾(ごみす)に野書(の)の松ときちやア板木屋(いたぎ)殺した。何でも早く上げて又後(あと)を受け取らねばならぬ。

画工

コウト此処(こゝ)の所八敵(かたき)役(やく)が名剣(めいけん)を奪(うば)ひ取(と)りてだんまりの立ち回り(まは)りがあらうといふもんだから、何れ樋(いづ)の口(くち)が又八後ろ(うしろ)に敷置(ふき)のあいしらいがねへと見てくれが良(よ)くねへ。左りへ刀(た)を持(も)たせたも右(みぎ)で切り倒(た)し左(ひだり)へ持ち直(な)して見(み)せたやつだ。

1 猿(さる)が餅(もち)を賣(う)つとすぐに喰(く)い尽(つく)くすところから、自分(みづか)の得(と)たものをすぐ右(みぎ)から左(ひだり)に他人(たにん)に与(よ)うてしまつこと。そこから転(ま)じて、即座(すなは)にやり取り(とり)すること。金銭(かね)と引き換(か)えにことをなすこと。その結果(けいこ)も、儲(たく)るつまい話(わ)のことをまじう。

2 新春の景物としての草双紙であったから、新年の売り出しに間に合わないとは大幅に売り上げに響いたのであり、手間賃を貰って仕事をしている職人達と板元との利害は一致していた。

3 この時期の草双紙合巻は紙上歌舞伎と呼ばれたほど歌舞伎との関係が深く、登場人物が人気役者の似顔によって描かれ、場面自体も歌舞伎の舞台を髣髴とさせるものであった。
4 『白氏文集』巻四、諷諭四「古塚狐」の冒頭部「古塚の狐妖にして且つ老いたり、化して婦人と為つて顔色好し」。『白氏文集』は唐の白居易の詩文集。八二四年に編まれた『白氏長慶集』五巻に自選の後集二巻、続後集五巻を加えたもの。平安時代に渡来、「文集」または「集」と呼ばれ、広く愛読されて後の文学に影響を与えた。

5 『夫木集』巻二十七「野干」「花をみる道のほとりのふる狐かりの色にや人迷ふらむ 藤原為顕」。『夫木和歌集』は、私撰類題和歌集。三六巻。藤原長清撰。延慶三年（一一三〇）頃成立、後日の補訂があるという。万葉集以後の家集・私撰集・歌合・百首などから従来の撰に漏れた歌二万七三五 余首を集め、四季・雑に部立し、類題に細分したもの。

6 「山椒大夫」「刈萱」「梅若」「梵天国」「愛護の若」「俊徳丸」「小栗判官」など、中世から近世初頭にかけて流行った説経節と呼ばれる語り物の一つ。後に、古浄瑠璃にも脚色され、さらに竹田出雲作の時代物浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』（享保十九年（一七三四）初演）で有名になった。通称『葛の葉』。これは女主人公の名で、和泉国信太の森の白狐が女にばけて安倍保名と結婚し、一子を儲けたが、正体が知れて「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の歌を残して古巣に帰ったという話。

7 読者のこと

8 山東京伝のこと。その京伝の合巻『八重霞かしくの仇討』（豊国画、文化五年、鶴屋喜右衛門板）には序文の代わりに「讀則」が挙げられ、「予が著述の絵草紙すべてかなら必ず読則あり。ほんもん本文画へたに隔てられて読よみがたきも此則このそくによりて読よみ八や禁や馬ば臺たいの詩しに蜘蛛くもの糸いとを得たるが如ごとくなるべし」として「よみはじめ」「つきへつゞく」など（一一三四ではないが）本文中に挟まれた印の説明がなされている。

9 黄表紙（仕立て）の本ことか。この時期からいまでは錦絵風摺付表紙の合巻体裁以外に、漉き返しに摺った黄表紙仕立ての廉価版が出されていた。

10 表紙の色摺り。

11 重ね摺りだから、前の色が乾かないと次の摺りに取り掛かれないのである。

12 恐れ入る。閉口する。

13 歌舞伎で、登場人物がせりふ無しで闇中にさぐりあう動作を様式化した演出方法、またその場面。普通、時代狂言に含まれたものをいう。暗闘。暗争。

14 水を出し、またはぶさく戸口。樋。水門。

15 大道具の一つで、木の枠に葉竹を隙間なく取り付け笹藪に似せたもの。

一 馬琴の生活

肖像画（国貞画）

「寫し見する鏡に親のなつかしきわが影ながらかたみとおもへば

作者舊詠 臺齋書」

墓所 茗荷谷 深光寺

日記 家記、読書記録、來客、執筆状況

板元・美濃屋甚三郎

娘（さき）婿・滝沢清右衛門 x 瀧澤 + 馬琴

板元・鶴屋喜右衛門（大阪）河内屋太助

「雌黄は黄色の顔料。誤写があると雌黄で塗り消しその上に改めて書いた。」

神女湯 婦人薬 戯作者達の売薬

書翰 愛読者グループとの文通 評答集

『馬琴書翰集成』（八木書店） 時系列化

二 八犬伝の執筆

自筆稿本 馬琴のものは比較的沢山残っている

挿絵の下絵も描いた 画工へ指示「老人ひとがらよく」「カモメ」（朱筆）

賛 羅文（兄）、信天翁（馬琴自身）

板下 筆耕と画工（浮世絵師）

彫師（彫工）・摺師・製本・発兌

美麗な装幀を施された板本 貸本屋本 商品価値を持ったことの反映

失明した馬琴と路女の口述筆記（一七七回中途）岩波文庫本十巻22頁（行目）

漢字を知らない女に一点一角を教えつつ口述筆記をしたと云う伝説のウソ

「回外剩筆」の誇張が一人歩き

葛飾北齋や山東京伝との確執と云う伝説も誤伝

執筆刊行一覧

文化十一年一月起稿 文化十一年十一月（文化十二年新版） 一八一五年48

天保十二年八月脱稿 天保十三年正月 一八四二年75

紆余曲折 板元の三変・息子宗伯の死（天保四年）・失明（天保四、十一年）

妻の死（天保十二年） 完結の執念

歴史に即して離れる（稗史という方法）

里見八犬士…… 名前だけが伝承されていた

三 八犬伝の世界

発端 伏姫物語 地図参照

伏姫と、大 幻影としての父母 孤児達の物語

名詮自性 人にして犬に従う（伏姫） 一つの尸八方へ散る（八房）

和漢古典の利用

軍記『平家物語』冒頭 流麗な文体

中国白話小説『水滸伝』 視覚的構成

後世に影響大

役行者と富士山

騎乗の聖性 獅子と犬

伏姫と八房 犬塚信乃と与四郎犬

四後の八犬伝

抄録本 草双紙・切附本・歌舞伎・常磐津・俳諧

影響作も少なくない

近代における問題

『小説神髓』の意義

八犬士は仁義八行の化け物か？ キャラが起つ

孝 犬塚信乃	もりたか 戌孝	生年月日	出生地	痣の位置
義 犬川莊助	よしとう 義任	長禄四年七月戊戌日	武蔵国豊島郡大塚	左腕
忠 犬山道節	ただとも 忠与	長禄三年十二月朔日	伊豆国北条	背
信 犬飼現八	のぶみち 信道	長禄三年九月戊戌日	武蔵国豊島郡煉馬	左肩
梯 犬田小文吾	やすより 梯順	長禄三年十月廿日	安房国安房郡洲崎	右頬
仁 犬江親兵衛	まさし 仁	長禄三年十一月	下総国葛飾郡行徳	尻（左の股）
智 犬坂毛野	たねとも 胤智	文明七年十二月	下総国葛飾郡市川	脇腹
礼 犬村大角	まさのり 礼儀	寛正六年十二月	相模国足柄郡大坂	右肘から二の腕
		寛正元年	下野国赤岩	臀部・左乳下から腋？

『南総里見八犬伝』執筆刊行一覧

輯	巻冊	回	執筆	刊行	画工	板元
筆輯	五五	十一	文化十一年正月、九月	文化十一年十一月	重信	山青堂
二輯	五五	二十一	文化十三年、月、八月	文化十三年十二月	重信	山青堂
三輯	五五	三十一	文政元年、月、九月	文政二年正月	重信	山青堂
四輯	四四	三十一	文政三年、月、六月	文政三年十一月	重信	山青堂
五輯	六六	三十九	文政四年四月、十二月	文政六年正月	英泉 重信	山青堂
六輯	五六	五十一	文政九年、九月	文政十年正月	英泉 重信	涌泉堂
七輯上帙	四四	六十二	文政十年九月、十一月	文政十二年十月	英泉	涌泉堂
七輯下帙	三三	七十三	文政十年九月、十一月	文政十三年正月	重信	涌泉堂
八輯上帙	四四	八十二	天保二年十一月、三年二月	天保三年五月	重信	文溪堂
八輯下帙	四五	九十三	天保三年二月、五月	天保四年正月	重信	文溪堂
九輯上帙	六六	九十二	天保五年二月、九月	天保六年正月	重信	文溪堂
九輯中帙	六七	百四	天保六、月、九月	天保七年正月	重信	文溪堂
九輯下帙上	六五	百二十五	天保七年二月、九月	天保八年正月	重信	文溪堂
九輯下帙中	五五	百二十六	天保八年二月、八月	天保九年正月	重信	文溪堂
九輯下帙之	五五	百三十五	天保九年二月、六月	天保十年正月	英泉 重信	文溪堂
九輯下帙之	四五	百四十三	天保九年十月、十年四月	天保十一年正月	重信	文溪堂
九輯乙号上套	三五	百五十四	天保十年四月、七月	天保十一年正月	貞秀	文溪堂
九輯乙号中套	三五	百六十二	天保十年十月、十一年四月	天保十二年正月	英泉 重信	文溪堂
九輯乙号下套	五五	百六十七	天保十一年五月、九月	天保十二年正月	重信	文溪堂
九輯下帙中	四五	百七十七	天保十二年正月、四月	天保十三年正月	英泉 重信	文溪堂
九輯編之下	四五	百七十九	天保十二年四月、八月	天保十三年正月	重信	文溪堂
九輯下帙下	四五	百八十四				
九輯結局編	四五	回外剩編				

「白龍亭」(<http://www.mats.dti.ne.jp/~opaku/>)
 「ふみくら」(<http://www.fumikura.net>)

一 読まれざる文豪

- ・通俗小説（近代的評価 近代小説の忘れ物 豊饒な稗史世界）
- ・勧善懲悪（仁義八行の化物 キャラクタ）
- ・伝説化（山東京伝との対立 路女との口述筆記）
- ・歪められた馬琴像（日記 書翰 家記）
- ・不遇な私生活（息子の早世 失明 武士としての滝沢家）

二 マルチメディア

- ・江戸読本というジャンル（貸本屋のプロデュース）
- ・美しい装丁（書物の商品化）
- ・ビジュアル化（錦絵 草双紙 歌舞伎 映画 アニメ）
- ・講談（史伝物 軍談の流行）
- ・ダイジェスト版（長編小説の宿命）

三 八犬伝の構想

- ・日本の『水滸伝』
- ・二部構成論（第一部 犬士列伝、第二部 対管領線）
- ・稗史七則（批評原理から創作原理へ）
- ・九輯完結へのこだわり
- ・言の過（義実の失言 玉梓の怨念 八房の執念）
- ・音読を意識した文体
- 伏姫 金碗大輔（>>大）
- 犬塚信乃・犬川莊助・犬山道節・犬飼現八・犬田小文吾
- 犬坂毛野・犬村大角
- 大江新兵衛

発端

・安房の乱と玉梓・伏姫を求める八房・虚空に散った玉

八犬士の出現と活躍

・犬塚信乃と与四郎・一雙の玉児・すりかえた村雨丸・こぶから出た忠の玉・芳流閣・乳兄弟の信と悌・神隠し・庚申塚の快拳・荒芽山の五犬士・嵐山の名笛・対牛楼の復仇・庚申山の妖怪・またたび丸・指月院の奇遇・賊婦船虫・身代わり首級・小篠落葉・穂北の郷土・古戦場に結ぶ庵・湯島の居合抜き・船虫の最後・五十子城落つ・反魂の術・名馬青海波・妙椿の妖術・政木狐・牝狸の死・結城の大法会・八犬具足八玉連串

天下の犬士

・大江新兵衛の上洛・軸を抜け出た虎

仁義の戦い

・里見討伐連合軍・国府台の奇襲・三浦沖の海戦・水陸大施餓鬼・洋上の和議・八筋の紐が結ぶ縁・大団円